

前橋城大手門現る

—発掘された前橋城—

1. 開催期間 令和3年4月24日（土）から
令和3年9月5日（日）まで
2. 開館時間 午前10時から午後4時まで
3. 休館日 毎週月・火（但し祝日の場合は開館し、直近の平日を休館とします。但し、ゴールデンウイーク中は連日開館します。）
4. 会場等 前橋市粕川町膳48-1 前橋市粕川歴史民俗資料館
第1展示室 電話027-230-6388
5. 講演会 加藤理文先生（日本城郭協会）「近世城郭を知る」
7月25日（日）午後1時半より粕川公民館大ホール



講師プロフィール

加藤理文（かとう まさふみ）先生

1958年静岡県浜松市生まれ。1981年駒澤大学文学部歴史学科卒業。文学博士。

静岡県教育委員会文化課を経て、袋井市立浅羽中学校教諭。公益財団法人日本

城郭協会理事・学術委員会副委員長。著書に『織豊権力と城郭－瓦と石垣の考

古学－』(高志書院)、『織田信長の城』(講談社)、『東海の名城を歩く 静岡編』

(吉川弘文館)など多数。日本城郭協会ホームページ「城びと」では、『理文

先生のお城学校』など連載中。

近世城郭を知る

加藤理文（日本城郭協会）

1 石垣、瓦、礎石建物

考古学的見地から見た織豊系城郭の特質は、「石垣、瓦、礎石建物」という3つの要素を持つ城として捉えることができます。だからといって、3要素すべてがそろっている必要はありません。どれか1つが欠けていても、織豊政権に臣従し3要素を導入しようとして築かれた城なら、織豊系城郭と言うことになります。



0 10 20尺
A scale bar indicating distances of 0, 10, and 20 feet (尺).

第1図 安土城天主復元南立面図

(考証：三浦正幸／復元：中村泰朗)

織豊系城郭とは、城の持つ本来の機能である軍事的側面の拡充を図りつつも、各地の武家勢力が城に対して求めなかつた「見せるための施設」を築くために、石垣や瓦、天守建築などを導入した城のことです。こうした見せるための城を築くことで、織豊政権に組み入れられたことを現すと共に、政権の裏付けによって地域支配を実行しているという正当性を示そうとした城だったのです。

この手本となつたのが、織田信長の居城・安土城でした。安土築城と同時に、織田政政権の支配下に入った領国には、信長の命令の下、「石垣・瓦・礎石建物」という3要素を持った城が次々と築かれていきました。しかし、前田利家の七尾城（石川県七尾市）などは、石垣や礎石建物を導入するものの、瓦の使用は見られません。おそらく寒冷地のために瓦の破損を考慮したためでしょう。あるいは、遠国であるため工人の派遣や、瓦の運搬が困難であったことも考慮する必要があるかもしれません。また、石垣の導入については、中心施設（天守や主要な門）に限定的に使用される場合がほとんどです。これは、石材の産出や、供給の関係、工人集団の問題と思われます。

関東で言うなら、関東支配をまかされた滝川一益の居城「厩橋城（前橋城）」が「瓦・石垣・礎石建物」を持つ城として整備される予定でしたが、本能寺の変勃発により、完成することはありませんでした。

豊臣政権下になると、急速に高石垣、瓦、礎石建物を持つ城が全国に普及して



羽柴秀吉時代の姫路城推定復元 CG（考証：加藤理文／CG：スズキ唯知）

いきますが、確実に地域差が存在します。これは、豊臣政権に参画した年代差によるもので、畿内周辺が最も早く、次いで四国、そして九州、最後が東北という順になります。東北地方における近世城郭の登場は天正 18 年（1590）以降になります。豊臣政権が全国統一を果たすことにより、近世城郭は全国に波及しますが、石高の関係、急激な普及に伴う工人不足、秀吉による巨大城郭築城の割普請等があって、3 要素を兼ね備えない城も多く出現しました。未成熟な技術あるいは工人集団を駆使して新規築城を実施したため、城の基本的構造は、古くからの土の城でしたが、そこに巨大な礎石建物のみを導入し、豊臣政権への従属を表現しようとすることすらあったのです。

3 要素の導入を持って、近世城郭に変化したと捉えることが可能ですが、織豊政権誕生以前にも、瓦葺建物や礎石建物、石垣は存在していました。だが、これらの事例は、各地の武将が単独で取り入れたに過ぎず、16 世紀代に起こった技術導入のうねりの中の一事象でしかないので。こうした技術力を一同に集め、築城技術というカテゴリーに再編し利用することで、領国支配のための拠点城郭を「見せる」ための城へと大きく変化させたことを以て、近世城郭の成立として捉えることが可能なのです。近世城郭の誕生は、発掘調査による出土遺物や遺構だけでは推し量ることは困難で、統一政権樹立に向けた政権構想の中に城造りの有り方も連動していたことを踏まえておかなければならないのです。

2 小田原参戦が生んだ近世城郭の普及

秀吉による全国統一の進展により、急速に近世城郭が普及していきます。新たに政権に組み入れられた諸大名たちは、秀吉の大坂城と同様の城を築くことによって豊臣大名の一員として認められたことを内外に示そうとしたためです。近世城郭を築くためには、①当時の最先端の技術の導入 ②技術者（工人）の掌握 ③築城に要する経費負担等が必要でした。そのため、いわゆる大大名と呼ばれる領主層だけが、近世城郭の採用に踏み切ることができただけで、大名の被官となった領主層（國衆）が独自に築くことは難しかったのです。中世城郭から近世城郭の変化は、多数の在地領主が乱立競合した時代から、少数の大名が家臣団を従えて君臨することになる社会の変化に伴う現象として捉えられます。

天正 18 年（1590）の小田原合戦では、土壘や堀を多用し、防御構造に工夫を凝らした小田原北条氏の築いた土の城の最高傑作ともいえる山中城（静岡県三島市）や松井田城（群馬県安中市）などの土の城が、いとも簡単に次々と落城していました。忍城（埼玉県行田市）などの例外を除けば、落城しなかったのは小田原城や蘿山城（静岡県伊豆の国市）という巨大城郭だけでした。小田原合戦に参戦した豊臣大名だけでなく、地方の領主層も土の城の限界を知った戦いだ



小田原北条氏の城の最高到達点である山中城の堀障子
ったのです。

この合戦後に徳川家康旧領に入った豊臣大名たちは、小規模な土の城や技巧を凝らした土の城を完全に放棄し、石垣・瓦葺建物を持つ近世城郭を築き上げることになります。遠江・駿河で、小田原合戦中も機能し、江戸期の軍学書でも土の城の代表として評価の高い諏訪原城（静岡県島田市）や丸子城（静岡市）も廃止されます。

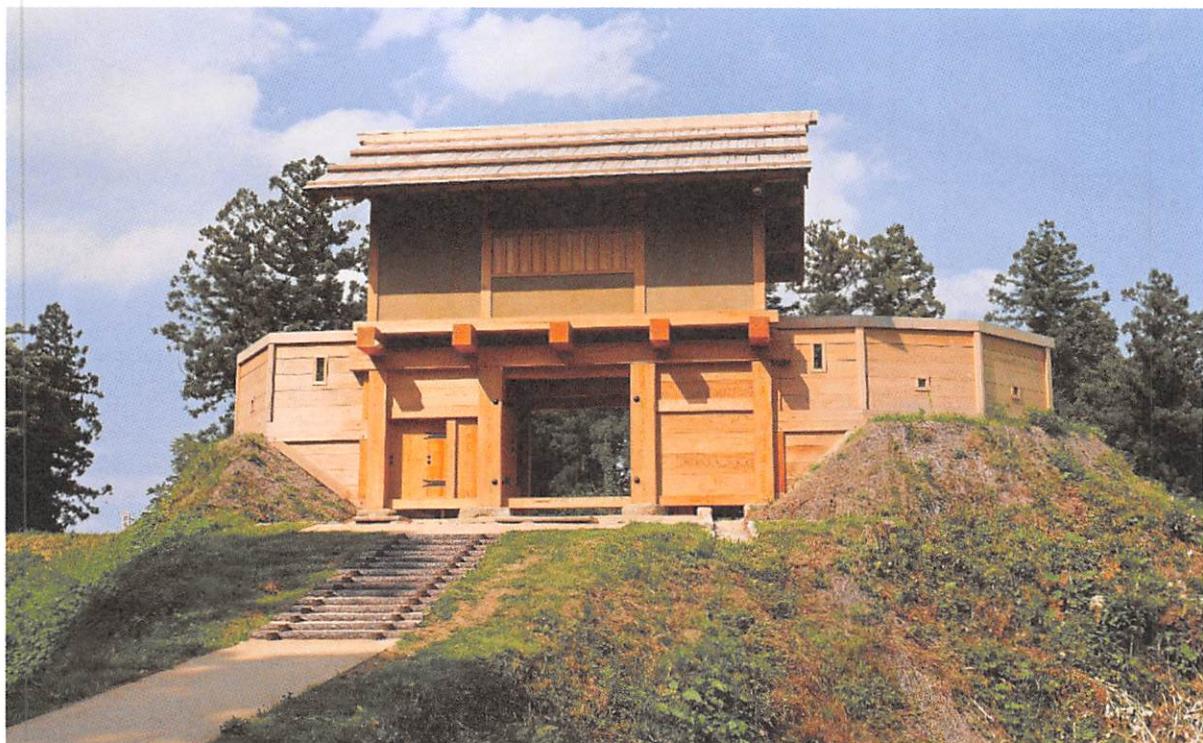
中世城郭の大多数は、山や谷などの天嶮を最大限に利用したもので、人工的な土木工事や建物の数は少なく、領主層（国衆）でも築城が容易でした。だが、近世城郭の大部分は、石垣や堀、厳重な門や櫓などの人工的構造物で防御を固めことになったため、築城に要する工事量や費用は、中世城郭の数百倍に達することになったのです。その上、領主の権威の象徴となる天守や御殿なども築くことになったため、限られた領主のみしか築くことができなくなってしまったのです。その数を比較すれば一目瞭然で、中世城郭と呼ばれる在地領主層の城は、全国に4～5万も存在していますが、近世城郭の数は300程度と、100分の1以下にしか過ぎなくなります。

小田原合戦後の大きな変化の一つとして、徳川家の領国内に石垣の城が出現したことも挙げられます。それが、井伊直政の箕輪城（群馬県高崎市）です。家



箕輪城三の丸西南面石垣（左）、鍛冶曲輪西面石垣（右）

康が五ヶ国を領有していた時代、配下の武将たちの誰1人として、石垣の城を築くことが出来ませんでした。しかし、箕輪城では、石垣と礎石建物を導入した城造りを目指したことが、発掘結果から判明しています。直政は、12万石という家臣団の中で最高石高を与えられていきました。直政は、それまでの土造りの箕輪城を大幅に改修し、石垣を積んだのです。石垣は、自然石を積み上げた石垣で、最大高4m強で、同時期の豊臣大名の石垣に比較すると非常に低かったのです。豊臣大名の石垣とは異なり、積み方及び完成度は極めて低いと言わざるを得ません。だが、石垣を導入した事実こそが重要で、併せて礎石を用いた大型城門跡も検出されており、徳川家臣団の中に近世城郭を志向した動きがあったことが証明されたのです。



復元された箕輪城の礎石建物の郭馬出西虎口門

3 全国に普及する近世城郭

近世城郭が、全国に普及する大きなきっかけの一つは、秀吉による二度の朝鮮出兵でした。小田原合戦の翌年、秀吉は急に「唐入り」をめざすことになります。「唐入り」は朝鮮半島を経由することとなり、その前線基地となったのが肥前名護屋城（佐賀県唐津市）でした。名護屋城築城は「割普請」で進められましたが、担当したのは秀吉の馬廻衆と北陸・東海・中部地方に所領をもつ残留組の諸大名です。大坂城、聚楽第、肥前名護屋城と「割普請」は主に、西国大名が中心になって進められましたが、名護屋城の周囲に築かれた陣所は、各武将の采配によって構築されたようです。陣所構築により、東北諸藩の大名も石垣を

構築し、瓦葺建物を採用しています。何より参戦渡海した武将たちによる異国での築城は、極めて切迫した状況の中で進められたため、協力体制のもとで対応せざるを得ませんでした。迫りくる李氏朝鮮軍も祖国を侵略軍から守るために必死でした。国内とは異なり、まさに命がけの築城だったのです。落城は、死と直結していました。城に入った武将たちは、協力体制のもと城の軍事増強に努めたのです。この生死を賭した戦いの中、それまで石垣構築技術を持たなかった伊達政宗は、朝鮮から「いしがきの普請仕上り候。かみしゅ（上衆）に、そつともおと（劣）り申さず候」と母に宛てた手紙に書いています。

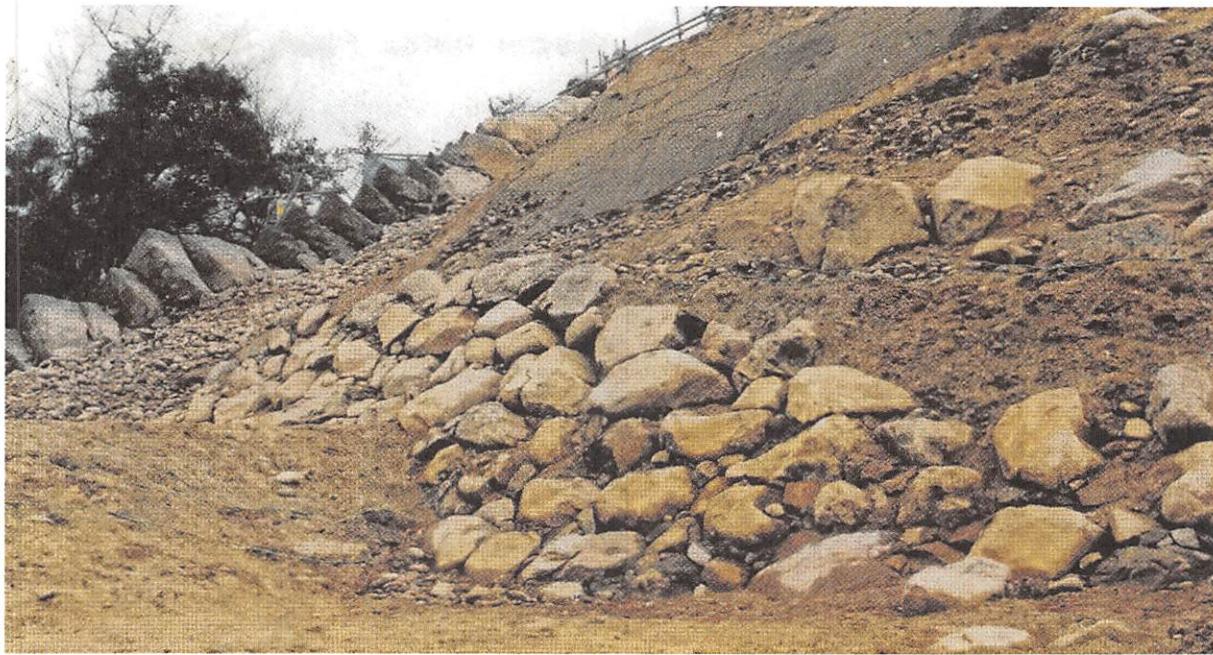


西生浦倭城の登石垣。山麓と山上部を取り囲む施設が多用された。

この文書の真偽は定かではありませんでしたが、仙台城（宮城県仙台市）で実施された本丸の石垣の解体により、その内側から2種類の石垣が検出されたのです。そのうちの1つこそが、慶長5年（1600）に伊達政宗によって築かれた仙台城の石垣でした。政宗は、朝鮮出兵で得た石垣構築技術を使って、仙台城に石垣を導入したのです。それが、元和2年（1616）の地震で倒壊し、その修築にあたって政宗期の石垣を除去して積み直すことをせず、埋め立ててその前に新たな石垣を構築したのです。そのため埋め殺された状態で政宗期の石垣が残っていたことが発掘調査で解ったのです。

発掘調査の進展は、石垣構築技術の普及があったことを証明しただけでなく、寒冷地では使用不能であると思われていた燻瓦が、築城当初に持ち込まれ、使用されていたことも証明しされてもいます。金沢城（石川県金沢市）や会津若松城（福島県会津若松市）では、近世城郭に瓦は不可欠と考え、使用に踏み切ったものの、寒暖差による割れなどの破損が相次ぎ、江戸期に至り耐久性の高い金

属瓦や赤瓦へと変化させたのでしょうか。

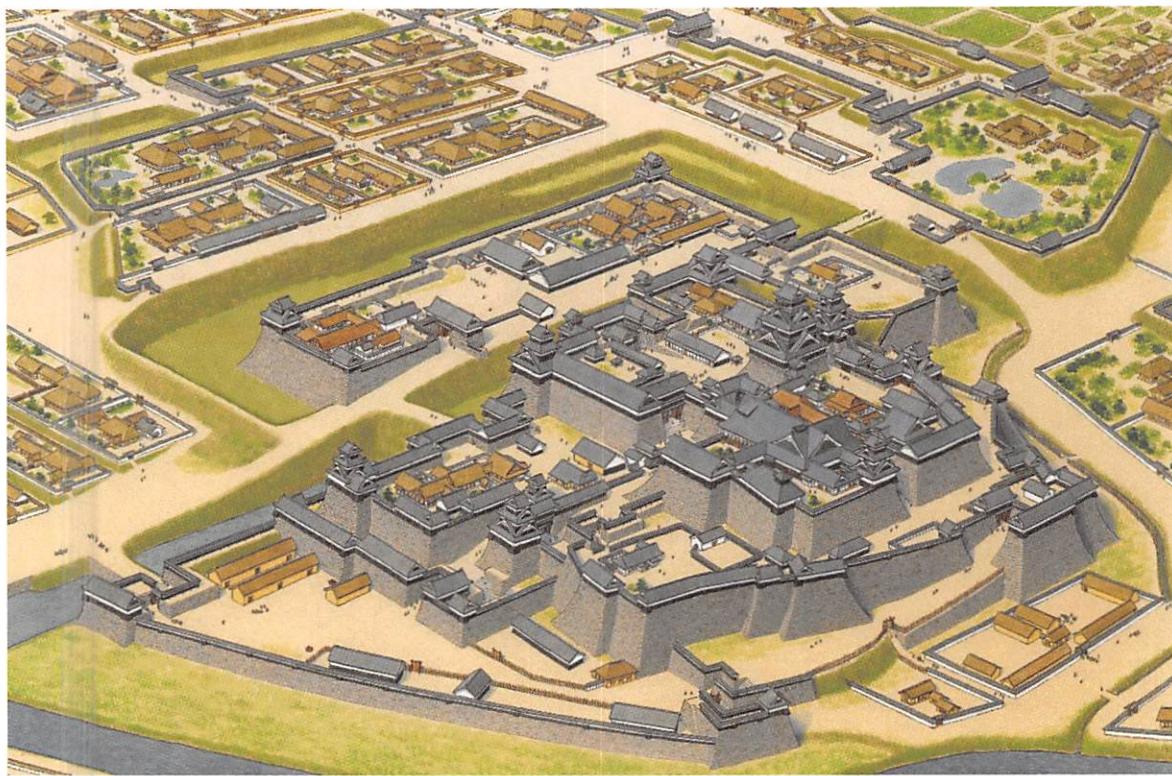


仙台城本丸跡北東部Ⅰ期（伊達政宗時代）石垣（『仙台城本丸跡 1次調査』2004 より転載）

4 関ヶ原合戦後の緊張関係による築城

近世城郭の全国普及に最も大きな影響を与えたのが、関ヶ原合戦後の大規模の大名の配置換えでした。この配置換えによって戦国時代最大の緊張関係が生まれました。関ヶ原合戦は、小早川秀秋（高台院の甥）の裏切り、吉川広家、島津惟新・豊久の傍観などがあり、大名間に不信感が広がることになりました。東軍に属し大幅加増を得た大名たちは、増封された石高に相応しい領国支配の拠点となる新城を築き、さらに隣国との国境警備や、領国支配を盤石なものとするために支城網も築きあげています。今日、大城郭と呼ばれる城のほとんどがこの時期の築城です。熊本城（熊本市）、伊予松山城（愛媛県松山市）、彦根城（滋賀県彦根市）、姫路城（兵庫県姫路市）、名古屋城（愛知県名古屋市）、津山城（岡山県津山市）、和歌山城（和歌山市）など数え上げたらきりがありません。関ヶ原合戦において、近世城郭化されていた岐阜城、伏見城（京都市）、水口岡山城（滋賀県甲賀市）、佐和山城（滋賀県彦根市）などを次々と落城させた主力兵器は火縄銃で、その制圧距離は150mと言われます。そのため石垣はより高さを増し、堀幅は広げられたのです。壁は、厚い土壁となり中空に板や瓦礫を挟み備えが固められるケースも見られます。普請と作事の融合はさらに進み、石垣上に城門や櫓という建築物を設けることで火力に対応しようとする防御施設も普及しました。

新城築城や改修にあたって、急務となったのが、外郭ラインの拡充です。重火器の射程から中心域をより離す工夫が施されました。たとえば、福島正則が改

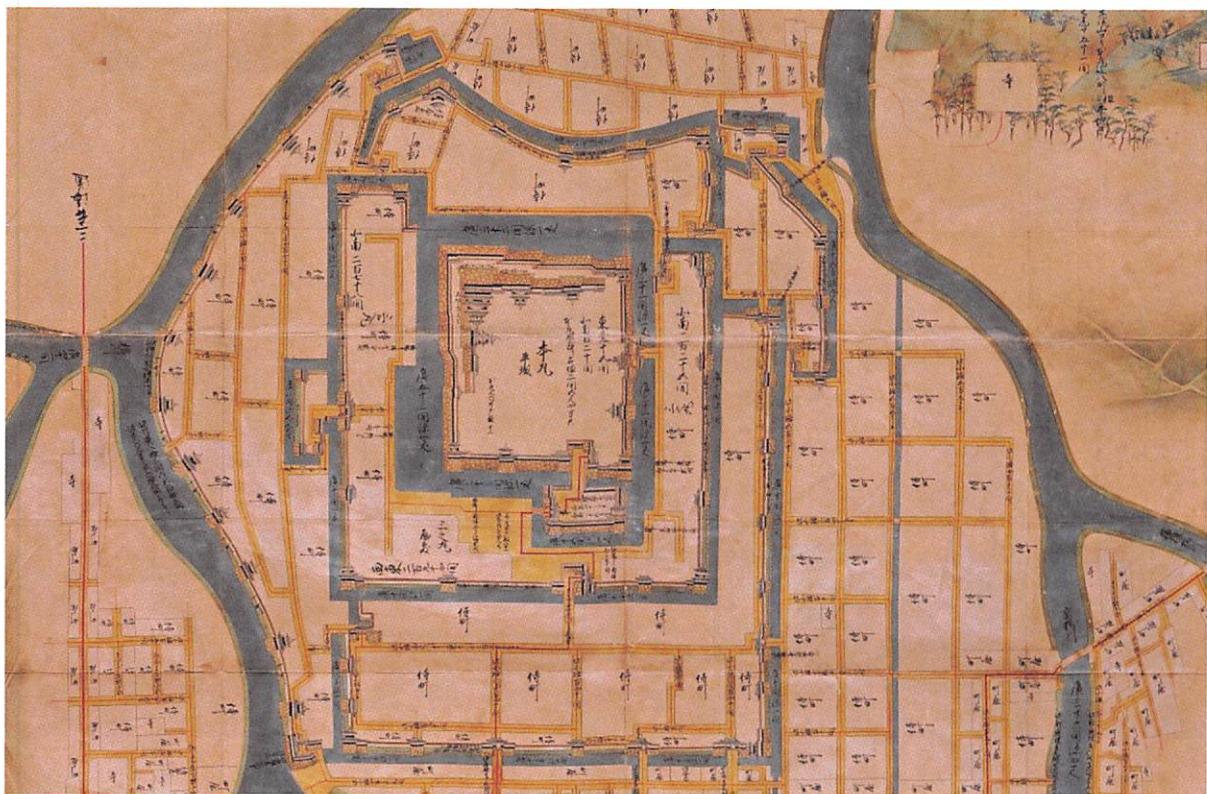


加藤清正時代熊本城推定復元イラスト（考証：加藤理文／画：香川元太郎）

修した広島城（広島市）をみてみましょう。広島城は、五大老の一人である毛利輝元が天正19年（1590）に築いた豊臣期を代表する城でしたが、正則は太田川を天嶮とするものの、北から西側の防御の薄さに危機感を抱いたと思われます。そこで、外郭を設けただけでなく、外郭に石垣による防御ラインを構築し、さらに15基もの二重櫓、2基の平櫓をほぼ等間隔に配置し、強固な防御網を築き上げています。これにより、主要部は完全に火縄銃の制圧距離外になると共に、外郭に攻撃拠点が設けられることになったのです。また、領国内に神辺城、鞆城（共に広島県福山市）、三原城（広島県三原市）、三次城（広島県三次市）、東城城（広島県庄原市）、亀居（小方）城（広島県大竹市）という6か所の支城を築いています。これらの城は、国境警備が主目的で、特に毛利領と接する亀居城は街道、港湾を監視、封鎖する重要な城で、発掘調査により総石垣で築かれ、最高所に天守を持つ城と判明、中小大名の居城に匹敵する規模を誇っていました。

このように、拠点城郭は天守や居住空間となる御殿を中心に、政治的拠点としての体裁が整えられましたが、支城網は高度な軍事的機能が優先された戦闘的な城だったのです。関ヶ原後の軍事的緊張関係は、領国統治のために政治的拠点を持つ大城郭が築かれただけでなく、極度に軍事的側面が優先された多くの支城という近世城郭も完成させたのです。

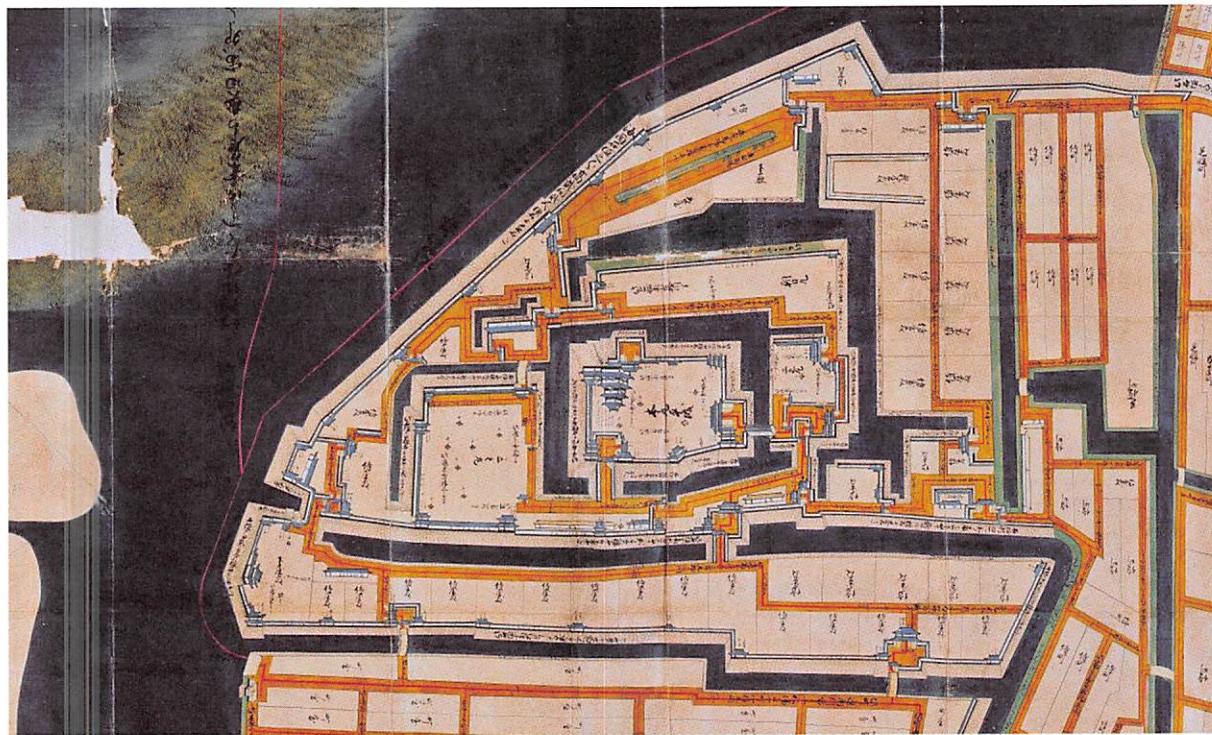
関ヶ原合戦後の大幅増封による築城あるいは改修によって、居城の近世化を



「安芸国広島城絵図（正保城絵図）」（国立公文書館蔵）

推し進めたのは豊臣恩顧の大名でした。同様に、この時大幅加増を受け転封された徳川配下の大名も、豊臣恩顧の大名と同様の城を築き始めます。関ヶ原合戦直後に、家康は本多忠勝に美濃加納城（岐阜市）築城を命じます。総奉行となつた忠勝他、東山道、北陸道の近隣五カ国の諸大名には手伝普請が命ぜられています。城は、主要部が石垣で囲まれたほぼ完成域に達した近世城郭でした。同様に、慶長6年（1601）に築城が開始された本多忠勝の桑名城（三重県桑名市）は、木曽三川の合流点という天嶮に位置し、幾重にも堀を廻らせ、各曲輪は総石垣造りでした。天守を築き、その他51基の櫓、46基の多聞櫓、水門3カ所を擁す大城郭となり、豊臣恩顧の城に匹敵する近世城郭となつたのです。

このように、西国に配置された徳川配下の大名たちは、石垣・瓦・天守を擁す近世城郭を築いていますが、関東に所領を与えられた大名の居城では、中世以来の伝統的な土造りの城が主流でした。石垣こそ持たないものの、瓦葺の櫓や城門を導入し、御殿建築もまた畿内中枢部の城郭と遜色ない建築で、言うなれば土造りの近世城郭の完成と評価されます。なぜ関東から東北にかけて石垣構築が普及しなかったのでしょうか。それについては、常陸の佐竹義宣の事績を記した『義宣家譜』に、面白い記載があります。慶長9年（1604）の久保田築城に際し「秋田地下人は勿論、諸士と雖も常陸譜代の者としては石垣普請等は一



「伊勢桑名城中之絵図（正保城絵図）」（国立公文書館蔵）

切不案内たるの間」とあり、家中をはじめ新領地の者たちも石垣造りに精通する者がいなかったとあり、技術者不足からの未導入が判明します。石垣を使用しない近世城郭を志向し推し進めた結果が、佐倉城（千葉県佐倉市）や水戸城（茨城県水戸市）、高崎城（群馬県高崎市）などの大土塁に、古河城（茨城県古河市）や岩槻城（埼玉県さいたま市）などの広大な水堀を持つ城となったのではないでしょうか。石垣こそ使用していませんが、そこに建つ建物は、西国の近世城郭の建築と遜色は無く、土造りではありますが枱形構造も石垣の城と同様で、これも近世城郭の一形態として理解されるのです。

2000～2005『史跡箕輪城跡』Ⅰ～Ⅴ 箕郷町教委、2006～2008『史跡箕輪城跡』6～8 高崎市教委
金森安孝・我妻仁 2000「仙台城築城記及び石垣修復」『考古学ジャーナル』456 ニュー・サイエンス社、2004 『仙台城本丸跡1次調査』仙台市教委

1997～1998『金沢城跡石川門前土橋（通称石川橋）発掘調査報告書』Ⅰ・Ⅱ 石川県埋文センター

1995『史跡若松城跡』、1998～1999 『史跡若松城跡』Ⅱ・Ⅲ 会津若松市教委

1980『芸州亀居城跡』第1・2次発掘調査報告 大竹市教委

1987～1991『筑前鷹取城跡』Ⅰ～Ⅴ 直方市教委